

# ふたり

久保智史

## 一

あと三日で夏休みも終わってしまう。

扇風機の風を真正面に受けながら、四年生の正樹は考えていた。

宿題をあしたとあさってで片づけてしまえるか。「感動したできごとを書きなさい」という作文を書かないといけない。田舎のばあちゃんの家には家族で行ったし、プールも行ったし楽しかったけど、感動というのとはちょっとちがう。

あと三日で感動するようなことがおこるのか。

「正樹、ゲームばかりじゃなくて、たまにはそとで遊んで来なさい」

昼、そうめんをすすっていると、母さんが正樹をじゃま者みたいに言った。いきなりそとで遊べと言われてもこまる。ガラスの器にただよう白いもつれたそうめんを見つめな

がら、正樹はふとおもいついた。

——そうだ、迷子になりに行こう。

どこか知らないところに行ってしまうえば、帰還したときに感動が味わえるかもしれない。あれ、どうやったら帰れるんだ？　なんて言いながら見知らぬ場所をうろろする場面を想像すると、こころが躍った。もちろんひとりじゃない。あいつとだ。

予想どおり、昼ごはんのおわる一時すぎに和馬が遊びに来た。このところ和馬は、いっしょにゲームをしようと週に三日はやって来る。そろそろ来るころだと思っていた。母さんもそれを予測して言ったにちがいない。

「迷子か、そりゃいいなあ。おれも作文まだだし」  
和馬は、正樹のアイデアに細い目を見開いた。

長身で色黒の和馬とは四年生ではじめて同じクラスになった。正樹とは反対で、走るのがはやい。学年男子で五位以内にははいる。それに少年サッカーもやっていて運動神